

BOOK
REVIEW



町医者だから言いたい! 1～3

長尾和宏 著
四六判各巻303ページ
定価1429円+税
▶ロハス・メディカル
☎03-5771-0073

本書は、小誌コラム「冬の時代の診療所経営」を執筆する長尾和宏氏が、朝日新聞アピタルに掲載しているブログを漏らさず書籍化したもの。2010年4月20日から2011年7月31日までの全469回分が3巻にまとめられた。

各巻とも帯に「そんなこと書いて大丈夫なの?」とあるように、町医者として日々診療する長尾氏の体験、実感、そして本音が生き生きと書かれている。それは読む者にとっても大変に小気味いい。

昨今、在宅医療の重要性が言われているが、長尾氏はとくに実践をしている。看取りまで行っているのだ。

本書にはこうある。「ある程度経験のある病院勤務医と一緒に末期がんの患者さんを何軒か訪問」すると、「こんな重症の患者さんを」『家に置いておく神経が信じられない』。さらに『長尾先生、こんなことしてよく逮捕されませんか?』「私は、『病院は、病気を治す修理工場であり死ぬ所ではない』と考えています。しかし99%の医者は、こんな私の考え方をオカシイと言います」。在宅医療の難しさが垣間見える一文だ。

実は長尾氏は、阪神淡路大震災を被災した。当時、公立病院の内科医長であった長尾氏は、次から次へと運び込まれる重傷患者たちの治療にあたる。ときに涙しながら、ときに無力感にとらわれながら。そしてその経験は、東日本大震災で生かされた。第3巻は震災直後の3月12日から始まる。自ら患者を抱える開業医として、支援物資を送るしかできないもどかしさを感じていたが、それでもGWを利用して被災地を訪問。自らの目で、耳で、手で患者を診て、支援した。

長尾氏の行動は、医師とは職業ではなく、生き方であることを感じさせる。そう知らしめるシリーズとなった。